長生きは不幸の始まり

楽に死ぬのがなぜ悪い

近藤啓太郎

光文社

長生きは不幸の始まり

楽に死ぬのがなぜ悪い

近藤啓太郎

KAPPA BOOKS LIBRARY

お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。また、今後、どんな本をお読みになりたいでしょうか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
(〒112-11)
光文社 出版局

楽に死ぬのがなぜ悪い 長生きは不幸の始まり

1993年5月30日 初版1刷発行

著者 近藤啓太郎
発行者 大坪昌夫
印刷者 盛庄吉
東京都文京区水道2－4－26
慶昌堂印刷

発行所 東京都文京区音羽2 振替 東京6－115347
株式会社 光文社 電話 東京(3942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 (大日本製本)
© Keitarō Kondō 1993

ISBN4-334-00535-7
Printed in Japan

R 本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3269-5784)にご連絡ください。

楽に死ぬのがなぜ悪い——目次

還暦を祝う日本に戻りたい　7
親子故の憎しみ　10
呆けは算術でわかる　14
羞恥心がなくなる恐怖　18
お人好しの母　24
犬猫以下になった母　29
脳梗塞より脳出血のほうがまし　33
生は善で死は悪か　39

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

長生きするのも自由である　44
主義主張で尊厳死に反対するのはエゴイスト　48
最期にできるのは苦痛の除去だけ　57
病気の経済的負担　62
告知した後悔　68
オランダを見習え　77
このまま死んでしまいたい気持ち　81
患者の心理に無知な医療現場　88

患者は医者にもっと文句を言うべきだ　94
九死に一生　102
退院後は、風呂にうまくはいれない　107
自殺を思いとどまらせるもの　112
ほのかな色気なんて意味がない　121
新婚当時を悔やむ夫　125
男は結局、女にかなわない　129
神田正輝は利口な男　133

欲望がなくなったら、この世は終わり　142
巨大な枯れ木のような老い　147
鳥葬が理想だ　152
「矢鴨騒動」に思うこと　158
最も愚(おろ)かな動物　165

装丁　スタジオ・ギブ

還暦を祝う日本に戻りたい

昔は六十歳になると「還暦」といって長生きのお祝いをしたものだが、今や六十でお祝いをする人などいない。七十歳になっても「古稀」のお祝いをしない。七十七歳の「喜寿」になってやっとお祝いする人が何人かいるというほどの長寿国だ。

えらく長生きした人に聞いた話だが、お祝いされて喜んでいたのは八十八歳の「米寿」ぐらいまでで、「白寿」つまり九十九歳のお祝いのときには、すごく不機嫌になってしまったという。ここまで生きてお祝いされると「お前、早く死んじゃえ」とせっつかれているような気分になるというのだ。「還暦」を祝う日本に戻りたいと思うのは、私だけではないだろう。

昔、有名な偉いお坊さんのところへ、檀家の人がお正月の掛け軸に字を書いてくだ

さいと頼みに行ったら、「親死ね、子死ね、孫死ね」と書いたという。

「正月早々、死ねとは何だ」

檀家の人が怒ったら、お坊さんはこう言ったそうである。

「この逆を考えてみなさい。これほどの不幸はない。年を取った者から順に死んでいくことが、もっともめでたい」

日本は世界一の長寿国だと言って喜んでいる人を見るにつけて、生活力のない老人を背負う若者の苦労を考えろと言いたい。年々増加する一方の老人の重圧で、若者が押しつぶされてもよいのか。

いまや、老人の死は若者を救う時代になったといってよい。したがって、老人の安楽死は尊(とうと)ばれて当然である。しかも、老人に安楽死が許されるなら、死の苦痛をなめずにすむのだから、一挙両得といえよう。

地震で校舎が崩壊したとき、下敷きになる生徒たちをかばって逃がしてから力尽きて教師が圧死した事件があった。この教師は、賞賛されて記念碑までが建てられた。しかるに、老人の安楽死はなぜ否定されるのか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

何でもかんでも長生きがいい、生きることはいいことだ、という考え方は、問い直さなければならないと私は思う。

長生きすれば、老人性白内障は増える。高血圧も増える。老人性痴呆症も増える。職を失い、貧苦に喘ぐ。まったくもって、過ぎたるは及ばざるが如しだ。適当なところで死ぬことを、ここらで真面目に考えたい。

人間をいちばん長生きさせた原因は、予防医学の発達にある。採血して調べれば、肝臓の悪いのだって直ぐにわかる。早期発見、早期治療というわけで、昔なら自覚したときにはもう末期で手遅れの状態だったのが、延命できる。

それは確かに科学の進歩のおかげだが、その先まで考えてみれば、いいような悪いような。いや、長生きしたことによる不幸な人のほうが、いまや数においては圧倒的に多いだろう。

元気で長生きの老人はほんのひと握りにすぎず、その他大勢の老人は、貧苦と病苦に喘いでいるのが実情である。

親子故の憎しみ

私の住んでいるのどかな南房総の田舎町でも、近年は徘徊する呆け老人が多くなった。

役場の拡声機から「なになにさん、七十五歳。服装は茶のジャンパーに灰色のズボン。朝から家を出て行方不明」といった知らせが頻繁に流れる。

そういうときは警察もえらいもので、千葉県警本部からもヘリコプターの応援が来て、捜索に当たる場合すらある。

あっけなく、元気でうろうろしているところを発見される場合もあれば、見つかったとき、田んぼに突っ伏して、すでに死んでいる場合もあった。

溺死だったそうだが、家族に知らせて引き取りに来るように言ったら、これが何と

子供が親の受け取りを拒否したという。

「うちでは葬式なんか出す気はないから、適当にそっちで処置してください」

ひどい話だと思うが、その子供の身になってみれば、あながちひどいだけでは片づけられない問題であろう。

全国的な調査でも、老人の引き取りを拒否する傾向は強まっている。

厚生省の一九九一年度の老人保健施設調査によると、老人保健施設を退所した年寄りの四割が、わが家に戻れずにいるのだ。

老人保健施設とは、介護が必要な老人が家庭復帰を目指して機能訓練などをする施設をいう。

八八年から始まった制度で、当初、在所期間を三カ月と想定していたが、核家族化や在宅医療の立ち遅れなどで家庭復帰がままならず、だんだんと在所期間が長期化している。

しかも長くなればなるほど家庭に戻れる割合は減り、逆に医療機関へ送られるケースが増えているとか。入所者の平均年齢は約八十二歳というから、まことに気の毒な

ことだ。

特に医療機関から老人保健施設へ入所した老人のうち、家庭へ戻れたのは三〇パーセントにすぎず、また病院へと逆戻りした人は五四パーセントとなっている。家庭で引き取りを拒否されたまま老人が施設や病院を転々としている図が浮かびあがってくる。

厚生省は「家庭の受け皿ができていないため」とみているそうだが、家庭としても、自分たちの生活を守るために、こうする以外に手がないのかもしれない。

実際のところ、呆け老人のいる家庭の悲惨さは、味わった者でなければわからない。まず垂れ流しの状態になるから、家中糞尿のにおいだらけになる。飯を食べても食べても、「嫁が何も食べさせてくれない」などとふれ歩く。時には隣りの家に上がり込んで、大便や小便をする。マッチをもてあそび、障子に火をつけたりするので目が離せない。

とにかく老人が呆けて、何年もうろうろされたら、そこの家は破滅してしまう。ボランティアがいるではないかと言われても、とてもそんなことではおっつかない。迷

惑をかけた隣り近所に謝(あやま)って歩くだけでもその家の人の心労はあまりある。
そうなると、親子だけに悲しみも憎しみも異常に募(つの)ってくる。
常識では通用しない感情が出てきて、早く死んでもらいたいという気になるのも無理はないと言える。
また、植物状態で生かされている家族を持っている場合も深刻である。
知り合いの奥さんがそうなって二年半ほど経過しているというが、入院代とか医療費の負担が、年に千八百万円もかかると聞いた。普通のサラリーマン家庭でまかなえる金額ではない。借金をし、家を売り払わなければならない場面も出てくるかもしれない。生き返らない人のために、健全な家族が駄目になっていくなんて、そんなバカな話はないではないか。
ここに至って私は、「長生きは不幸の始まり」とつくづく思うようになった。長く生きたばかりに呆けて、子供たちにさんざん苦労をかけ、親に対して憎しみを感じさせるほどの不幸がこの世にあるだろうか。

呆(ぼ)けは算術でわかる

十年あまり前のことだが、ある老学者が痴呆症になって、温暖の地にひきこもった。家族はしばしば見舞いに行ったが、老学者は子供を見ても誰だかさっぱりわからない。

「お父さん、具合はどう？」

「失礼ですが、どなたでしたか」

子供たちが、わからせようとしていろいろ苦心しても、きょとんとした顔で見返すばかりであったという。

これを私に話して、「みじめだ。これ以上の悲劇はない」と言ったのは、痴呆症の老学者と同輩の老学者であった。まだ元気な老学者はそのとき、自分もいずれは痴呆症になるのではないかという不安をまったく感じていなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo